

マレー系政治家の華人ブレンについて

佐藤考一 (桜美林大学)

マレーシア、インドネシア、ブルネイなどでは、プミプトラ政策やプリブミ政策でも知られたように、国政や外交の運営をマレー系*政治家が中心になって行っていることは周知の事実である。だが、これらのマレー系政治家たちの多くが、政策立案や演説草稿の作成の過程で、華人のブレンを重用していることはあまり知られていない。本稿では、筆者が垣間見たそれらの事例を紹介することにした。

まず、マレーシアであるが、引退後も活発な政治活動を行なっているマハティール元首相や、現役時代のアブドラ前首相は、彼らの演説草稿の作成に華人研究者のファー・キムベン氏を用いたことがある。ファー氏は福建系で1968年生まれ、ケンブリッジ大学やフレッチャー法律外交大学院などで学び、ストレーツ・タイムズ紙の記者の経験もある。現在も、ナジブ・ラザク首相やラザリ・イスマイル氏、スリンASEAN事務総長らに近く、彼らの外交政策の策定や演説草稿の作成に携わっている。本人の弁では、マハティール元首相やアブドラ前首相との関係は、演説草稿毎の契約だったという。

次に、インドネシアであるが、既に故人となったアリ・ムルトポ中將、ベニー・ムルダニ国防治安相、アリ・アラタス外相などが政策ブレンとして重用した華人研究者に、ユスフ・ワナンディ氏がいる。ワナンディ氏はASEAN 戦略国際問題研究所連合 (ASEAN

ISIS)のまとめ役として日本でも有名である。彼も福建系で、1937年に西スマトラで生まれ、インドネシア大学修士課程を修了、学生時代は反共の運動家としてもその名を知られ、ジャカルタの戦略国際問題研究センター (CSIS)の幹部と国民評議会 (MPR) 議員を長く務めた。英字紙 Jakarta Post の社長でもある。現在も健筆を振るっており、Global, Regional and National: Strategic Issues & Linkages などの著書、論文も多数ある。

ブルネイには、長くモハマド・ボルキア外務貿易相 (王子) の下で外務次官を務めたりム・ジョクセン氏がいる。リム氏について詳細は不明だが、現在第二外務貿易相を務めており、2006年7月にはブルネイ代表団を率いてASEAN外相会議に出席している。

これらの事例は、マレー系中心の国であっても、有能な人材であれば華人でも政治に影響力を行使する立場になれることを示している。直接政治家になるのが危険であれば、マレー系政治家のブレンとして活動し、華人社会の利益を間接的に守ることも出来る。政治的にも経済的にも東南アジアにおける中国の影響力の伸長が話題に上る今日、彼らはどのようにマレー系政治家たちの政策を導くのか。興味を引かれる問題である。

* 本稿ではインドネシアのプリブミ系の住民をマレー系とする。